論説

傷寒論ではなぜ発熱悪寒の順序か

In the “Shang-han-lun”, Why does the Fever come first
and then Chills?

岩崎 勲

Isao IWASAKI

要旨 傷寒論の条文で、発熱と悪寒が同一文中に同時に述べられている時は、常に発熱悪寒の順序になっている。現代生理学的には悪寒が発熱に先行するので、傷寒論での発熱悪寒は生理学的継起を表現したものではないと思われる。勿論ここでの発熱は体温計的体温上昇を意味するものではない。陰証、陽証を代表する症候をとりあげ、それらが条文の中でどのように配置されているかを検討することによって、陽証に専らな症候、陰陽両証に出現する悪寒、陰証に専らな症候の順に文章が構成されており、発熱悪寒の順序は、この文章構成上の規準に由来するものであると推察された。

はじめに

傷寒論では、1つの条文中で「発熱」と「悪寒」（または悪風）が同時に述べられているのが13カ所ある。第2, 3, 12, 13, 23, 27, 35, 38, 141, 150, 153, 216, 400章である（傷寒論講義¹⁾での番号に準ずる。以下同じ）。いずれの条文でも発熱が悪寒に先行して書かれている。ただし1カ所、第12章のみは、一見逆の配列になっていて後述するように注釈を要する。

我々の現代生理学的常識では、悪寒が発熱よりも、たとえ短時間であっても先行することは異論の余地はない。したがって我々は悪寒発熱と呼ぶことに慣れている。

中西深齋²⁾は、「悪寒之中且発熱、発熱之中且悪寒也」と言っているが、これは悪寒とそれに接近して続く発熱が次々と継起していくことを述べたものである。

発熱が悪寒に先行して書かれていることに関しては、先人の傷寒論の解説書は、関心がなかった

とみえて触れていない。しかし傷寒論ほどの書物で、きまって発熱悪寒の順序に配列されていることが、ただ偶然で意味のないこととは思われない。この配列に関して、何らかの規準があるのではなかろうか。

陰、陽を特徴づける症候を選びそれらが条文中でどう配置されているかを検討することを通して、この問題にアプローチしてみた。

発熱、悪寒の陰陽

「病、有発熱悪寒者、発於陽也、無熱悪寒者、発於陰也」

これは寒、熱と陰陽の関係の原則を述べた有名な文章である。熱は陽証において重要な症候である。三陽の病位をそれぞれ特徴づける熱の在り方にも違いがあって、三陽の分別にも大事な指標となっている。そのため熱に関係した語句が豊富にみられる。熱、発熱、熱自発、往来寒熱、煩熱、潮熱、惡熱、身熱、大熱、瘀熱、疼熱、熱越、熱実、協熱、微熱などである。それに対して寒は、

陰陽両証に亘ってみられる症候であり、また六病位のそれぞれにおいて、さほど大きな違いを示さないで、寒、惡寒、往来寒熱、厥寒、微惡寒、などがみられる程度である。

森田幸門氏³⁾は寒熱について次のように解説している。「発熱といえ、自然將に発揚せんとするの意を含蓄し、熱といえ、既に発揚し了りたる、即ち現実に体温の上昇せることを意味する。若し太陽に於て將に発揚せんとする機を蔵するに拘らず単に熱という時は、必ずその下に“自ら発す”の句を使用している。寒は閉塞の意味であり、病のために身体或は神経系、循環系、消化器系等の機能減退或は麻痺を証候とする患者の状態である。」

発熱は陽証全般にみられるものであり、太陽病では翕々発熱、陽明病では蒸蒸発熱する。発熱は、陰証においては例外的にしかみられないことは、第311章「少陰病、始得之、反発熱、脈沈者、麻黄細辛附子湯主之」において反発熱と言っていることからわかる。惡寒は陰陽両証に亘って出現するので、単独ではどちらを指すのか明らかでない。惡寒の陰陽は、他の症候と組合わされて初めて明確になる。

陽証の惡寒の例としては、第1章「太陽之為病、脈浮頭項強痛而惡寒」。陰証の惡寒の例としては、第397章「惡寒、脈微而復利、利止、亡血也、四逆加人参湯主之」

第1章では脈浮、頭項強痛と組合わされて表証の、第397章では脈微、復利、亡血と組合わされて陰証の惡寒であることがわかる。惡寒が陰証では基本的に重要な症候であることは、第327章「少陰病、下利清穀、惡寒外熱、手足厥寒、脈微欲絶、身反不惡寒、其人面色赤……通脈四逆湯主之」

これは少陰の極の状態、当然あることが予想される惡寒がみられないことを言っていて、逆に少陰では惡寒が重要であることが示されている。

ところで第1章は、多くの解説書で、太陽病の大綱を示すものとされている。大塚敬節氏⁴⁾は、「この章で惡寒を挙げて發熱を挙げていないのは、惡寒のあとに發熱の来ることを予想している

のである。もし熱があつて惡寒を伴わなければ太陽病ではない。だからこの場合は發熱よりも惡寒が大切である。」として「而惡寒」に特別の地位を与えている。

奥田謙蔵氏⁵⁾は、「而の一字を挿みて上句に接続し、以て其の陰証の惡寒に非ざるを明かにす。……今先づ陽証の初発にして未だ發熱するに至らざる者を挙げ、以て病の状態を明かにし、之を太陽病の大綱と為す。」として、第1章が陽証の初発の状態を明かにしたものであるとしている。

桂麻各半湯、桂枝二越一湯の条文に「發熱惡寒、熱多寒少」とあり、実際の臨床でも熱感が大部分で惡寒は僅かしかない、時には惡寒がないことすらある太陽病を経験することもある。惡寒を伴わなければ太陽病でないとか、「而惡寒」とあるから發熱よりも惡寒が大切である、と結論づけるのには問題がある。

前述のように惡寒はそれ自体では表証を特徴づける属性を有せず、他の付随した症候の存在があつて初めて表証の惡寒と判断される。惡寒は發熱の契機となる場合にのみ陽的性格が付与されるのである。この契機を予測させるものは今の場合、脈浮、頭項強痛であり、まだ發熱がなくともこれらが揃えば表証の惡寒と断定できるのである。

發熱、惡寒を併列的に比較してどちらが大事か、とみるのではなく、熱を基本とする陽証にあつて、陽証の先頭バッターである太陽病の開始を告げる重要な症候として「惡寒」を位置づけるべきであろう。

こうしてみると第1章は、奥田先生が言われるようにまだ發熱の出現していない段階での太陽病の初発、開始を宣言したものである。第2章、第3章は、太陽病がやや進行して發熱、汗などの症候が現われ、中風、傷寒の分別がなされているのである。

さて發熱と惡寒があれば陽証であるのが原則であるが、例外もある。

第400章「吐利汗出、發熱惡寒、四肢拘急、手足厥冷者、四逆湯主之」

霍乱が進行して精気虚脱し、一見表証類似の發熱を來たしたが、これは虚熱であり、真寒假熱に

属するものである。四肢拘急、手足厥冷でそのことを示唆している。

中西深斎²⁾が発熱、悪寒などについて述べているのを、少し長いが引用しておく。

「三陽の主とする所熱に在り。……蓋し悪寒発熱は、悪寒し且つ発熱する也。是を太陽と為す。……三陰は寒を主とする也。表熱、外熱、発熱、微熱等有り、然れどもその脈、証は固より三陽に同じからず。三陰の脈証に於るは、沈細にして手足寒、甚しきときは脈なく四支厥逆す。故に表熱、外熱、発熱、微熱等有るといへども、三陽の脈浮、一身ことごとく温なるが如きには非ざる也。是の別となす。悪寒の別に於る凡そ三道あり。陽に発する者あり、陰に発する者あり、精気の虚に因る者あり。その陽に発する者は必ず脈浮にして熱あり、是即ち桂枝麻黄のゆく所也。陰に発する者は、必ず脈沈にして熱なし、是即ち附子のゆく所也。その精気の虚に因る者は必ず表裏已に解するの後にある也。此既に病の使しむる所に非ず、固より薬の以て治すべき有ることなし。……夫れ三陽の外よりする、その主とする所熱に在り、その候する所専ら悪寒に在り、故に悪寒を以て外候の標準となす也。是の故に太陽の篇首に於て姑く発熱を措て独り悪寒を挙げ、以てその標準たることを示す也。脈に於ては則ち必ず浮、故に例に曰く、脈浮なる者は病表に在り、発汗すべし、又曰く、脈浮数なる者は発汗すべし、又曰く、脈浮は宣しく汗を以て解すべし。……三陰の内よりする、その主とする所寒に在りてその候する所の法、その熱ありや否やを拆ち、発熱を以て外候の標準となすに在る也。是の故に論に曰く、少陰病始めて之を得て反て発熱、脈沈……是に於て微にその汗を発すを法となす也。惟だ厥陰は則ち寒の極也。熱の極也。故に或は発熱悪寒すといへども、頗る太陽に異れり、何を以てかその異なるをみに、太陽は則ち脈浮、手足自ら温、厥陰は則ち脈微にして絶せんと欲し、四支厥逆す、以て異らんとする所也。……頭痛は即ち太陽に専らにして厥陰これ与かる。例に曰く、太陽之病たる、脈浮頭項強痛して悪寒す。」

条文中の症候の配置

以下、傷寒論の条文での症候を示す語句の配置について検討しよう。

「頭痛」は上記中西深斎の文にある通り太陽病を専らとするが、時に陰証で現われることもある。頭痛と発熱が同時に述べられているのは7カ所ある。うち6カ所は陽証の頭痛であり、いずれも頭痛発熱の順序になっている。

例えば、第13章「太陽病、頭痛発熱、汗出悪風者、桂枝湯主之」。残りの1カ所は陰証の頭痛を示し、発熱頭痛の順序になっている。

第95章「病、発熱頭痛、脈反沈、若不差、身体疼痛、当救其裏、宜四逆湯」

ここでの発熱は真寒假熱であり、脈沈でそれを示している。

「脈浮」は25カ所にみられる。第1章や、第38章「太陽中風、脈浮緊、発熱惡寒、身疼痛、不汗出而煩躁者、大青竜湯主之……」にみられるように、脈浮が頭痛、発熱と一緒に述べられている時は、脈浮、頭痛、発熱の順に配列されている。中西深斎の引用文にみられるように、脈浮があると何らかの表熱があるとみてよい。

例えば、第234章「脈浮而遲、表熱裏寒、下利清穀者、四逆湯主之」

表熱裏寒の脈における反映が脈浮而遲であり、太陽と少陰の併病で先急後緩を指示したものである。

陽証に主として現われる発熱、頭痛、脈浮はこの順に表証としての特異性が高くなる。それ故、表証特異性の高いものほど、文頭に近く配置される傾向が伺える。

陰証を特徴づける症候には、四肢拘急、手足厥冷、手足厥寒などがあり、悪寒と共に述べられている時は、第400章にみられるように悪寒の後におかれている。

しかし最も陰証を性格づけるものは脈症である。

第291章「少陰之為病、脈微細、但欲寢也」。第333章「少陰病、脈沈者、急温之、宜四逆湯」

これらの脈沈、微、細が第95章のように発熱、

頭痛と共にあるとき、第27章、第397章のように悪寒と共にあるとき、また上述の同じ陰証の症候である四肢拘急などと共にあるときは、いずれもこの脈候が後に置かれている(ただし成本、宋本では第23章に脈微而悪寒とあって脈微と悪寒が同列に配置されている)。

この脈沈、微と他の症候との配置関係は数が少ないので断定的なことは言えないが、脈沈、微はいろいろな症候の中でも最後尾または後半に置かれていることが多い。

例えば、第315章「少陰病、身体痛、手足寒、骨節痛、脈沈者、附子湯主之」

しかし、時には陰証を指示していない時もあり、この場合は文中での位置は一定していない。

以上をまとめると、陽証の脈浮、頭痛、発熱は、陰陽を通じて出現する悪寒より前に置かれ、陰証の手足厥冷、四肢拘急は悪寒の後、脈沈、微はその後に置かれる傾向がある。

脈浮、頭痛、発熱—悪寒—手足厥冷、脈沈微
悪風—四肢拘急

表証としての度合いが強いものは文頭のほうへ、陰証のものは文の後半へと遠心性に配置されるという文章構成になっている。

ところで初めに述べたように第12章は悪寒発熱の如き順序になっている。

第12章「太陽中風、陽浮而陰弱、陽浮者、熱自発、陰弱者、汗自出、齎齎惡寒、淅淅惡風、翕翕發熱、鼻鳴乾嘔者、桂枝湯主之」

この章は解釈に異論も多く問題の多い文章である。この条文は長沢元夫氏⁶⁾の書にあるように「脈浮者、熱自発、齎齎惡寒、翕翕發熱」と「陰弱者、汗自出、淅淅惡風、鼻鳴乾嘔者」とが対句形式になっているとみなすとわかりいい。竜野氏の引用文にもある通り熱自発は発熱と同等のものである。汗自出に対応するように発熱を熱自発にしたと思われる。

汗出……汗自出
↑ ↓
發熱……熱自発

こうしてみると熱自発、齎齎惡寒は發熱、齎齎惡寒と同等とみなしてよい(翕翕發熱は上にある

熱自発に対応して熱の出方を記述したものである)。したがって第12章も他の章の發熱惡寒の順序と実質的に同じと考えてよい。

今までの考察は傷寒論の正文とされている条文についてしてきたが、後人のものとされている条文では、上で述べてきた語句の配列はしばしば乱れている。

例えば、第197章「陽明中風、口苦咽乾、腹滿微喘、發熱惡寒、脈浮而緊、……」

第127章「太陽病、當惡寒發熱、今自汗出、不惡寒發熱、……」

正文と後人の文章では、語句の配置に対する配慮も違うようである。

まとめ

以上、陰陽の代表的な症候をとりあげ、条文中における配置を考察することにより、傷寒論の条文は語句がランダムに並べられているのではなく、一定の秩序をもった文章構成になっていること、發熱惡寒という配列は、我々が理解しているような生理学的継起を表わしたのではなく、このような文章構成上の配置に由来するものであることがわかった。

ではなぜ、こうした配置になっているのかということになるが、私の如き浅学の身には計りかねることであり今後の研究にまきたい。

本論文の要旨は第2回東洋医学会北海道支部会に発表した。

文 献

- 1) 奥田謙蔵：傷寒論講義，医道の日本社，1965
- 2) 中西深斎：傷寒名数解，漢方医学書集成，名著出版36，p.88，1981
- 3) 森田幸門：漢方と漢薬，第二巻第七号，p.3，1の35
- 4) 大塚敬節：傷寒論解説，創元社，p.134，1の66
- 5) 奥田謙蔵：傷寒論講義，医道の日本社，p.8，1の65
- 6) 長沢元夫：康治本傷寒論の研究，健友館，p.76，1の82

(1986年5月13日受付)